

3-3

主題

チームで取り組んだ末期癌の看取り

看取り

副題

来年の桜は見られない
～その時その一瞬が貴重だった～

研究期間

12ヵ月

事業所

特別養護老人ホームゆとりえ

発表者：小松 里絵

アドバイザー：

共同研究者：丸山 雅也、 山形美代子

電 話

0422-72-0311

メール

yutorieday@parkcity.ne.jp

FAX

0422-72-0321

URL

今回発表の
事業所や
サービスの
紹介

ゆとりえは武蔵野市の東部杉並区との境にあり、静かな住宅地でありながら近隣にスーパーや公園、保育園があるという恵まれた環境にあります。特養30名、ショートステイ2名、デイサービス35名、在宅介護支援センターを併設しており、平均要介護度は4・5です。

《研究前の状況と課題》

＜研究前の状況＞Aさん女性。平成20年1月入所。入所直後は環境変化とご主人を心配する言葉が多く聞かれるが徐々に生活に慣れる。社交的で働き者、涙もろく淋しがり屋。アルツハイマー型認知症で「お父さんは？」「バスの時間は？」と同じ事を何度も何度も尋ねる毎日。しかしあつと言う間に誰からも愛され、職員と一緒に誕生会の司会をするなどムードメーカー的な存在となる。そんなAさんに平成21年2月突然の余命宣告。定期健診で異常があり検査の結果直腸癌の診断、他臓器への転移もあり余命1年は厳しいと。ご家族は積極的な治療を望まずAさんにもご家族の希望で告知せず。根治は厳しいが今後の生活を考え人工肛門造設術を受ける。

＜課題＞

○チームで取り組む未経験の認知症末期癌の看取り。医療設備が整っていないホームで、苦痛緩和を図りどのように精神的に支えていけるか。

○家族が仕事の関係で関わる事ができない。チームが家族に代わって支えて行かなければならない。

《研究の目標と期待する成果》

＜研究の目標＞

- ①過去に経験した老衰とは異なる看取り。最期までAさんらしく生きる為にチームとして支える。
- ②ご家族は延命を望まず、本人も自らの症状を理解できない状況の中で、徐々に現れる体調変化や痛みに対しどこまで関われるか見極める。
- ③看護師や医師の不在な夜を介護職が乗り越えられるようチームで取り組む。
- ④ご家族との関係をチーム全体で理解し看取る。
- ⑤日常のケアの質を落とさずに看取りに取り組む。

＜期待する成果＞

○最期の最期まで寄り添いAさんが主役となる一年にする。

《具体的な取り組みの内容》

- ①最期までAさんらしく生きるために・・・。
「洋服を買いに行きたい・居酒屋に行きたい」
⇒身体的負担を考慮しその日の体調を加味し疲労しないような手段を検討し実施した。
「寝る前にウィスキーを飲みたい」
⇒本人の希望するウィスキーを購入、専用グラスを用意し寝る前のひと時を楽しんだ。
「けんちん汁を作りたい」
⇒事前に材料と作り方手順のレクチャーを受けAさんの味になるよう、Aさん自身も麻痺が出現した右手にごぼうを左手に包丁を持ち、見事な包丁さばきを披露した。
- ②病状悪化や状態変化にはその都度話し合いを行い他職種との連携を密にした。
- ③日々の状況を細かく観察し、状況に応じた申し送りを行う事で介護職の不安軽減に努めた。鎮痛剤を使用しながらも精神的不安を軽減できるよう時間が許される限り傍に寄り添った。そして今後予想される症状についてチーム内で勉強会を実施、それぞれが的確な状況判断ができるように努めた。
- ④面会出来ないご家族に随時状況を報告し、今後の対応について確認を行った。
- ⑤他の利用者に対しケアの質を落とさない為に職員間の連携を密に行い、時間を有効的に活用した。

《取り組みの結果と評価》

- 病状の進行を日々観察しながら、Aさんの希望を最優先とし「毎日楽しむ生活」を援助できた。
- 明るく振舞いいつも心根は淋しがり屋のAさん。チームの気持ちは常に一つとなり、病状が悪化してからも「独りぼっちではないよ」と一緒に過ごす時間を多く持てた。
- 通常業務を行いながらも職員一人一人がAさんと個々に寄り添う時間、二人だけで過ごす時間を持てた。
- 痛みを訴えないAさんの想いを組み取り、最期までAさんらしくあるために嘱託医や他職種との連携を密に取り、痛みの緩和を行った。
- ご家族の想いを組み取った看取りが行え、ご家族も最期まできちんと見送る事ができ満足できた。
- 最期に口にしたのは大好きなウィスキー。そして一口飲む度に満面の笑み。最期の最期までAさんらしく「生活」する事ができた。

《まとめ》

初めての癌緩和ケアの看取り。過去の看取りを活かしチーム一丸となって看取る事が出来た。日頃からAさんとの密な関わりがある生活施設だからこそ、深い愛情の看取りを行う事が出来たと感じる。チームのAさんを想う強い気持ち、最期まで寄り添いたい気持ちがAさんらしい前向きな看取りに結び付いたと思う。

《提案と発信》

看取りケアをチームとして取り組むためには、職員の合意、共通認識作りが重要である。ゆとりえでは、看取りケアに入る前の ①全職員による話し合いによりケアの方針を確認 ②他職種、家族を含めたカファルスとケアプラン作成 ③その後必要時のカファルス ④看取りに立ち会った職員の振り返りの会 ⑤全職員とご家族とのお別れ会を実施している。

【メモ欄】追加資料 有 無

注：参加者が自由に記入できるスペースです。空欄のまま提出下さい。